

# メメント・モリ、または先駆的決意性

森 一郎

はじめに 或る学者の死

「メメント・モリ（死を憶えよ）」 『貢献する気持ち』は、このモチーフを印象深く告げて始まる。著者の滝久雄は中学生のとき、友人の兄の死を、いわば「哲学的な出来事」として受け止めたのだという。その高校生は、がん告知を受けた直後には遊びに耽ったものの、死の三ヶ月前から一心不乱に勉強するようになり、最期まで学ぶことを貫き通した。その執念には、「死んだら終わり」といったやけっぱちの考え方とは違う、何かがある。中学時代の滝は、そう直感した。死の淵までひたすら学習し続けることで生を走り抜けた若者の文字どおり必死な姿が、著者のその後の哲学的探求の出発点となったのである。

ひとは死に直面するとき、本来の自己に立ち帰ることがある。迫り来る死の避けがたさを真正面から受け止め、その自覚から翻っておのれにふさわしい状況内行為を掴みとろうとする、このようなあり方のことを、かつてマルティン・ハイデガーは「先駆的決意性」と名づけた。西洋古来の“memento mori”の教えが、この哲学説に甦ったとも言えるだろう。終末医療の現場で問題となる「死の受容」には還元されない、活動的・能動的な「臨死の倫理」を、「先駆的決意性」から基礎づけることだってできるかもしれない。しかし、だからといって問題が片付くわけではない。生硬な概念を弄んで分かったつもりになるのではなく、あくまで、卑近な現実の生活経験に差し戻して考えること。「死を死として能くする」という人間の規定を、空疎なお題目としてではなく、死すべきわが身に引き受けること。本稿ではこうした血肉化の作業のために、『貢献する気持ち』の流儀に倣って、範例を一つ挙げてみたい。私の年長の友人であった或る学者の死という実例をである。

本稿では、渡邊二郎（一九三一 二〇〇八年）という人物を、メメント・モリの思想、または先駆的決意性という概念を考えるうえでの恰好の見本として取り上げる。

昭和一ケタ生まれの渡邊は、一九六二年、当時世界最高水準のハイデガー研究書を弱冠三十歳で世に問い、二年後には東京大学哲学科の助教授となった。その後も、専攻の近現代ドイツ哲学研究の方面で傑出した業績を次々に発表、学界に揺るぎない地位を確立した。東大教授を停年後は、放送大学で十年間教え、七十歳で退職したが、研究意欲は減退するどころか、ますます精力的に著述や翻訳、講演等にいそしんだ。七五歳になろうとする二〇〇六年夏、珍しく不調を訴え、検査の結果、膵臓にがんが見つかった。余命いくばくもないと診断された渡邊は、どうしたか。

病室で彼がまず行なったのは、自分のこれまでの仕事を網羅的に列挙したリストの作成であった。膨大な数の著作、論文、翻訳、書評、随想等を書誌として纏めるその作業を、三ヶ月かけて完成させてからは（翌年春、自費出版<sup>1</sup>）、ハイデガーに関する新たな研究書の

<sup>1</sup> 渡邊二郎 『備忘のための著作目録 私の哲学上の著述活動およびそれと関連する諸活動の概

執筆に没頭していった。自宅で療養を続けながら、一年にわたって集中的に取り組み、その年の暮れには、四百字詰原稿用紙九百枚に及ぶ原稿が成った。入稿後は病状が悪化し再入院したが、病院のベッドに横たわりつつ刊行に向けての作業を続けた。校正の指示を書き込んだ原稿一式を見舞いに訪れた弟子に託したその三日後、二〇〇八年二月、享年七六歳にて逝去。遺著は、同年五月に盛大に行なわれた偲ぶ会の日に合わせて出版された<sup>2</sup>。

生涯を哲学研究に捧げた、或る学者の壮絶な死　この事例からわれわれはどんなことを学ぶことができるだろうか。

### 読むこと、考えること、書くこと

思索一筋とはいっても、渡邊は無趣味で無粋であったわけではない。文学や音楽を愛し、芝居や音楽会によく出かけた。談論風発の酒席を好み、ドイツ語の歌を披露したりもした。若い時には、詩や小説の創作に手を染めたという。散歩、庭いじりから手料理まで、日常を愉しむことにも長けていた。そういう渡邊にとって、日常的でありかつ尋常ならざる、物との係わりがあった。そう、書物との付き合いである。彼が学究生活の大半を過ごした自宅の書斎に入ると、主人なきその部屋に、「知への愛」に劣らず、「書物への愛」が今でも立ちこめているのを、ひしひしと感ずる。

哲学書、とくにドイツ語で書かれたテキストの読解にかけては無双の読み手であった彼は、読むことから学びとった考えることを、書くことに具現させては数多のテキストへ編み上げていった。この文献学者にして哲学者は、本質的に作家だったのである。「血をもって書かれたもの」(ニーチェ)<sup>3</sup>を愛好し、また自分に要求することで、この文の人は、膨大な著述を物していった。渡邊二郎という人の生涯は、遺された著作群にすべてが尽くされているといっても過言ではない。だからこそ、病を得た彼は真っ先に、『著作目録』の完成に心血を注いだのである。そしてそれは　「あとがき」にあるとおり　、「そのような自己確認の基礎作業を行わないと、自分の存在が、自分にとってさえも、風塵のように飛び散って、不確かなものとなってしまう危機感」(『著作目録』一二五頁)ゆえであった。後述するように、この自己総括作業は、「終わり」である以上に「始まり」であった。

次いで渡邊は、まだやり残していた仕事の一つにひたすら邁進していく。ハイデガー没後に発表され「第二の主著」とも言われる『哲学への寄与』の精緻な読解の仕上げ作業である。密度の濃い一年間で、彼は、抗がん剤投与という重度の加療の身にありながら、分厚い研究書を一冊書き下ろすという離れ業を、見事やり遂げることになる。「上巻」に予

---

略』西田書店、二〇〇七年三月、一　一三一頁。本書を以下『著作目録』と略記。

<sup>2</sup> 渡邊二郎『ハイデッガーの「第二の主著」』『哲学への寄与試論集』研究覚え書き　その言語的表現の基本的理解のために　理想社、二〇〇八年五月、一　三七九頁。本書を以下『研究覚え書き』と略記。

<sup>3</sup> 渡邊の好んだ一句「血をもって書け」が出てくる『ツアラトウストラはこう言った』第一部の章のタイトルは、「読むことと書くことについて」である。文献学者にして作家であった哲学者の決意表明が記されている。

定された部分しか結局出なかった、とトルソーに終わったことを難ずる者はいないだろう。

『研究覚え書き』のどのページを開いても、これを書かなくては死んでも死にきれないと、全身全霊でハイデガー研究者としての総決算を果たそうとした、告白とも絶叫ともつかぬ著者の鬼気迫る思いが伝わってくる。まさに「血をもって書かれた」この遺書を前にしては、「先駆的決意性」という言葉の響きすら、軽すぎるのではないかと思われるほどである。

ハイデガー研究で学界デビューした渡邊は、同じくハイデガー研究でおのれの学究的生を締めくくった。『哲学への寄与』の本邦初の本格的な研究書であったこの遺作は、それ自体「始まり」であったが、彼の死はもう一つの、いっそう大きな「始まり」を地上にもたらした。研究と著述に捧げた生涯の全容を伝える著作集全十二巻の刊行がそれである。

死後に著作集が出るほどの人でも、作品があちこちに散り散りとなって、どれがどれでどこに何があるか見当もつかなくなっているケースが多い。それらを網羅的に収集し書物として編集するには、遺された者たちに、気の遠くなるほど遠大かつ煩瑣な渉猟作業が課せられるのが常である。これを見越してか、渡邊は、前述のとおり、がん宣告を受けた直後、残された貴重な時間を費やして、自身の総作品目録を一冊の本に纏め上げた。その長大なリストを、書斎の本棚に大事に並べてあった自著作品群と照らし合わせれば、夥しいテキストを、さほどの苦勞なく、著作集用の原稿として組み立て直すことができる。これに沿って編集しさえすればよいのだよと、『著作目録』は遺族に語っているかのようであった。一冊が丸々、故人の遺言であったことになる。

そしてじっさい、かの遺稿＝意向にほぼ沿った形で、没後二年有余のうちに、総計七千頁超の大規模著作集の刊行が始まった<sup>4</sup>。学問的達成と文学的芳香を兼ね備えた文章を集めた各巻六、七百頁に達する十二巻が毎月配本され、一年後に全巻完結というのは、奇蹟に近い出来事である。だがそこには、遺族の献身的尽力とは別に、おのがいのちと引き換えに世に遺した書き物をゆめ散逸させてはならぬとの著者自身の燃えさかる執念が働いていたのである。

あと三つ、読むことと書くことへの思索者の執念が育んだものに寸言しておきたい。

渡邊は翻訳の大家でもあり、ドイツ語の難解な哲学書を流麗な日本語に移し変える名人だった。ハイデガーの主著『存在と時間』の改訳を晩年に果たした彼が、次に取り組んだのは、ほかでもない、「第二の主著」の翻訳だった。著作権の問題で公刊は不可能と分かったうえで、ほぼ全文をひそかに訳していたことが、死後明らかとなった。パソコン内に残されていた四百字詰原稿用紙千五百枚余の訳稿データは、二十部限定出版された<sup>5</sup>。

翻訳家としての数ある仕事のなかでも、エトムント・フッサールの主著『イデー』第一巻の訳業は傑出していたが、その完結編に当たる『イデー』第三巻の訳出作業を、別な担当者による第二巻翻訳完成前に、渡邊は少しずつ行なっていた。こちらも死後に、本

<sup>4</sup> 『渡邊二郎著作集』全十二巻、高山・千田・久保・榊原・森編、筑摩書房、二〇一〇年一〇月より刊行開始。完結予定は二〇一一年九月。以下『著作集』と略記。

<sup>5</sup> マルティン・ハイデッガー『哲学への寄与』渡邊二郎試訳、千田義光編、私家版、二〇〇九年八月、一四〇七頁。

文の半分近くの訳稿がパソコン内に見つかり、それを引き継いだ弟子の努力により、第一巻と同じ書店から、完訳が「共訳」で出版された<sup>6</sup>。

渡邊は、ドイツ語を話すことと書くことにも秀でていた。海外に知己も多く、求められてしばしばドイツで講演し、またドイツ語論文を寄稿した。それらのテキストを一巻に集めて彼の地で出版するという、ドイツ語論文集の企画が目下着々と進められている。

以上三つの刊行事業は、『研究覚え書き』や『著作集』のように当人の遺志が実現されること以上の産物である。しかしいずれも、非凡な読み手にして書き手であった哲学者の執念が生み出した、来たるべき思索の「始まりの余韻」<sup>7</sup>だと言うことができよう。

渡邊が死の数週間前、病状が急速に悪化しつつあった頃、万感の思いを込めて「時間が足りないなあ」とポツリ呟いた音声が残っている。なるほど、この大学者に、やり残したことはまだ幾らでもあったことだろう。だが他方で、彼は臨終間際、「私は欠如していません」と家族に言い残している。為すべきことを成し遂げ、まったきありさまへと実させた者の馥郁たる安らかさに、死者は達したのである。

#### 「先駆的決意性」とその転機

ここで今一度問おう。この学者の生き死にから、われわれは何を学べるだろうか。

渡邊は、彼自身がライフワークとして究めようとしたハイデガーの学説そのままに、本来的な「死への存在」を生き切ったのだと、私は思う。その最期の日々からひとは、「先駆的決意性」とは何であったか、を学び直すことができるのである。

だが、その前に再確認しておかねばならないことがある。病死を目前にした学者が最後の力を振りしぼって研究に邁進したことを、「死への先駆」という概念に重ね合わせるのは、初歩的な誤りだと指摘する向きがあろうからである。

じっさい、ハイデガーの言う「先駆的決意性」とは、寿命の尽きた病人や老人が死に臨んで従容として示す「覚悟」とは異なり、いつ誰にとっても絶えず問題となるおのれの死の可能性への係わりを意味すべきである。「人間は生まれるやいなや、もう死んでおかしくない歳に十分になっている」<sup>8</sup>　これが、『存在と時間』の死の分析を導くモットーであった。

<sup>6</sup> エトムント・フッサール『<sup>イデー</sup>純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第三巻 現象学と、諸学問の基礎』渡辺二郎・千田義光訳、みすず書房、二〇一〇年一月。

<sup>7</sup> 渡邊が最晩年に情熱を傾けて読解したハイデガーの遺著『哲学への寄与』の本論第一部はAnklangと題されている。渡邊はこの語を「鳴り響き」と訳しているが、私自身は、形容矛盾を厭わず、「始まりの余韻」と訳したい誘惑に駆られる。辞書的には、「なごり・かつてを想起させるもの」、「共鳴・共感」、「和音」といった意味のこのドイツ語を、ハイデガーは、古代ギリシアにおける「第一の始まり」以来の形而上学の歴史が完成＝終末を迎えようとしている現代、思索の「あらたな始まり」への移行のかすかな予兆が響き渡っていることを宣べ伝えるべく、用いているからである。鳴り響いているのは、終わりどまりの「和音」　不協和音も和音のうちなのである。

<sup>8</sup> M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 15. Aufl., Niemeyer, 1979, S.245. 以下、本書からの引用は、略号SZを添えて、括弧内に原書の頁数を記す。原佑・渡邊二郎訳『存在と時間』(全三冊、中公クラシックス版、二〇〇三年)をはじめ、邦訳書には、原書頁数が欄外に記されているものが多い。

だとすれば、死の間際に至ってはじめて、おのれの生の有限性を自覚するのでは遅すぎるということにもなる。ピンピンして老病の翳など微塵もないうちに、死を「先取りする」ことこそ肝要なのだ、というわけである。

たしかに、「死への存在 ( Sein zum Tode )」という概念は、年齢や健康にかかわらず、各人の生きているがままのあり方を、<sup>アプリアリ</sup>生来的かつ無差別に規定するものである。人間誰も死に差しかけられて生きており、その点では経験も境遇も関係ない。

ただし、「死への存在」には大きく分けて二通りあるというのが、ハイデガーの言い分である。つまり、本来的なそれと非本来的なそれである。せわしない日常を生きるわれわれは、死のことなど構ってられないから、そんなの関係ないといった風情でよそよそしくふるまっている。世のひとは日々死んでいくが、それはそれとして穏当に処理される。死との関係は、さしあたり隠蔽され、たいてい忘却されている。つまり、日常的な「死への存在」とは、非本来的なそれである。これに対し、死の可能性を自分自身の問題として直視し、それを可能性として持ちこたえるのが、本来的な「死への存在」である。これが「死への先駆 ( Vorlaufen in den Tod )」と呼ばれる。そして、先駆という仕方でおのれ自身に先んじつつ、自己の内奥から呼びかけてくる「良心」の声に耳をすませ、最も自分らしい実存可能性を掴みとる境地が、「決意性 ( Entschlossenheit )」である。よく生きること、つまり幸福の追求が、各人の人生において繰り広げられるのであって、その戦場に打って出る先駆的決意性は、死という終点に平安に辿り着くための慰めでも気休めでもない。

それはそうなのだが、しかしだからといって非本来性がなくなるわけではない。生きている間じゅう、のべつまくなしに先駆しつつあることは、われわれにはどだい無理である。死のことばかり考えていたのでは委縮して陰気な人生しか送れない。お気楽に生きること、それが日常であり知恵ですらあることには変わりないのである。そんな人生の一瞬、死すべきいのちの閃光に差し貫かれ、自分の全生涯が一挙にその意味を開示される凝縮した時間を生きるということが、ごくまれにある。そのあるかなきかの<sup>アクシデント</sup>遭遇を、それゆえハイデガーは、「瞬間 ( Augenblick )」と名づけた。瞬間は「永遠」へ至る道であるとは、形而上学の由緒正しき理説だが、世界内存在に踏みとどまろうとする現世哲学にとっては、「立ち止まる今」へと飛翔することではなく、人生のただなかで行為することこそ、問題の中心である。「瞬間」に襲われた者は、そのつどの具体的状況において大事なことは何であり、そのためには何をしなければならぬか、が豁然と見えるようになるのである。

だとすれば、死への存在が本来的となり、生を輝かせるには、やはり何らかのきょうかけが必要だということになる。誰でも「死への存在」にウスウス気づいているのに、いや気づいているからこそ、そ知らぬフリをしているのだから、そのヴェールを突き破る何かが必要だ。そして、そういう跳躍板の最たるものが、不治の病なのである。もちろんその他にも、脱出困難な危機、癒しがたき挫折、別離の悲痛、取り消せぬ負い目、といった「受難」の数々が、人生行路にはあろう。そればかりではない。一冊の本との出会いによって、つまり純然たる読書経験によって、先駆的決意性へと目覚めさ

せられることだってありうるのである。

『貢献する気持ち』の冒頭に登場した、死にゆく若者は、まだ高校生であった。十分若い、死ぬにも十分な年頃であった。かりに不治の病に取り憑かれなかったら、この青年がかくも真剣に勉学に没頭するなどありえなかつたらう。がんを宣告されてはじめて、わが身の有限性に思い至り、そこから向き直って、いのちの炎を激しく燃やし尽くしたのである。三ヶ月という短い間、彼は先駆的決意性の「瞬間」を生きた。そのとき生はあたかも一個の全体となり、十数年の歳月がそこに凝集するに至ったのである。

『貢献する気持ち』の著者となる滝も、中学生のとき友人の兄のそのような生死に接して漠然と使命感に目覚めたのち、しかしそれ以上なかなか進まなかった。二度目の転機は、三十代半ば過ぎ、骨の病気をみずから患って「死を予感した」ときに訪れた。これをきっかけに、いのちを活かすことへの希求が、貢献心の研究という形で、高められ深められていったのである。また、被爆によって白血病に冒された身で絵筆をとり続けた平山郁夫、朝鮮戦争で敵軍に捕えられ処刑寸前に命拾いし政治家を志した金大中、といった本書に出てくる事例にしても、苦難の襲来をきっかけとして自己本来の為すべきことを掴みとる「転回」のドラマにほかならない。

人間という迂闊な生き物は、「死を忘れるな」と言われ続けても、死すべきわが身の定めをそれでもついつい忘れてしまう。そしてそれも当然なのである。人間はべつに死ぬために生まれてくるのでも、死へとまっしぐらに生きているのでもないのだから。前向きに生きるためにこそ、死へと先駆する機縁が、ことさら与えられなければならない。

では、本稿の主人公たる渡邊二郎の場合は、どうであったか。

幼いときから天皇のために死ねと教え込まれ、思春期を迎える頃、東京大空襲で被災し、虚無が現前する光景を目撃したと思ったら、敗戦を境に今度はあらゆる価値の転覆を目の当たりにしてたじろぎニヒリスティックになった青年が、「死への存在」というハイデガーの思想に親近感を抱いたことは、想像に難くない。ちょうど滝久雄が、プラトンの対話篇からソクラテスの生死を学び知って、知人の兄の死に感じたのと同質のものを古代ギリシア哲学に見出し、また二五歳のときに出会った一行の言葉に心底動かされたのと同様に、渡邊にとって、ハイデガーをはじめとする哲学書との出会いは、それまでの名状しがたい私的体験に、くっきりと形を与える機会となった。その後、学者としての華々しい経歴のウラで味わった様々な苦衷や憤激も、「死への先駆」の思想の血肉化をますます促進したにちがいない。死の思索に人一倍親しんでいたはずのその彼に、しかし、がん宣告は、まったく新しい機縁をもたらすことになる。先駆的決意性の思想は、それだけの重みは他にありえないほど、それほど重い重しとして彼にのしかかった。人生のその「瞬間」、最重量級の重みに耐えた彼は、この期に及んで自分が大切にしなければならないのは何か、そのためには今何を為すべきかを、まざまざと見てとったのである。

不治の病を宣告されてから一年半、渡邊は絶命の際まで、力のかぎりおのれ本来の生を生き、学問的生涯をまっとうした。最期の日々の、静謐さのなかにも凝縮された一刻一刻

は、ちょっとでも触ると血がドクドク噴き出してしまうくらい、濃密な一途さをそなえていた。本来的な「死への存在」とはこういうことだ、と彼は実地で示してくれたかのようである。死を目前にして先駆的決意性の権化となったハイデガー学者がやってみせたことから、われわれは何を学ぶことができるだろうか。そう改めて問わなければならない。

#### 終わり始まりの共属と、始まりの二重性

ハイデガーは「死への存在」を、「終わりへの存在」として定式化した。「死でもって表わされている終わることは、現存在〔そのつどの私 引用者注〕が終わりに達していること (Zu-Ende-sein) を意味するのではなく、この存在者の終わりへの存在 (Sein zum Ende) を意味する」(SZ 245)。われわれは、臨終に至ってはじめて終わりを迎えるのではなく、終わりをつねにすでにうちに孕んだ生を、時々刻々生きている。しかしだからといって生者は、もっぱら終わりへと関係づけられているのみではない。われわれの生は元来、終わりへの存在でありつつ、それと等しく根源的に、始まりへの存在なのである。渡邊はまさにこのことを、最期の日まで病魔と闘いながら身をもって示したのだった。

「始まりへの存在」という言葉を使ったのは、ほかならぬハイデガーである。死という終わりを問題にするだけでは「一面的」だとして、「誕生」という「もう一つの 終わり」を対置し、「始まりへの存在 (Sein zum Anfang)」(SZ 373) というもう一つのテーマを切り出して幕を開けるのが、『存在と時間』の歴史性の分析なのである。そしてそれは、「死への存在」、なかんずくその本来形としての「先駆」を、肉付けすることでもあった。

ここでわれわれが出会っているのは、終わり始まりの共属の間柄にほかならない。

先駆とは、人生の終末をポーッと眺めることではない。おのれに襲いかかる実存の端的な不可能性としての死を、あくまで可能性として持ちこたえ、耐え抜くことであり、そこから一転して、死によって縁どられた爾余の実存可能性をくまなく見通し、かくしておのれに最も固有な「よき生」を掴みとり、その成就に向かって突き進むことである。こうした前進性格からして、先駆とは元来、終わりへの存在であるに劣らず、始まりへの存在なのである。とはいえ、どんな「死への存在」も、つまり人生がおしなべて、「始まりへの存在」だと主張するのは、おそらく言いすぎだろう。始まりも終わりもなく同じことの繰り返しが続くのが日常であり、それが生活というものだからである。だが、そういう淀みなき日常に、上述のように、何らかの転機が訪れることがある。断絶を意味するその裂開は、終わりでありかつ始まりである。何か新しく始まるためには、それまでの何かが終わらなければならない。終わりがなければ何も始まらないのである。

われわれはそのつど現に死への存在である、とは、生は終わる前にすでに終わっている、ということである。しかしそれでいて、生は終わったあとでも終わらない。すべて終わったつもりになるのは、いつでも早すぎる。先駆とは、つねに遅咲きなのだ。ちょうど、早熟のデビューを果たし、半世紀にわたってハイデガーを研究し続け、功成り名遂げた学者が、死の数日前まで書き下ろし研究書の出版に余念なかったように。

始まりは、そのように終わりと共に属するのだが、それとともに注意すべきことがある。始まりは二重化されて生起する、という点である。始まりのこの二重性をも、渡邊の生き死にから、われわれは学ぶことができる。

ハイデガーによれば、先駆的決意性は、われわれの実存が根底から「時間的」に規定されていることを浮き彫りにする。「将に來たらんとする」可能性としての死や、転機として訪れる「瞬間」については、すでに述べたが、始まりはむしろ第一次的には、「過去」からやって来る。より正確に言えば、「過ぎ去ってもはやないもの」ではなく「かつて既に在り現に存し続けるもの」という意味での、「既存性 (Gewesenheit)」のほうからである。おのれが何であったか、何でありえたか、という来し方の全体を、私は、私の「本質」をなすものとして、おのれのうちに携えている。いや逆に、そういった丸ごとの既存性が、現在の私を、氷山の一角のように携行していると言うべきかもしれない。そんな私が、何かを新しく始めることへと、前のめりしないで乗り出していけるとすれば、それは、既往の深き地平へと遡行することによってはじめてなのである。ハイデガーはこの既存性の捉え返しのことを、「反復 (Wiederholung)」と呼ぶ。先駆とは同時に遡行なのだ。

先駆が空疎さを免れうるのは、この遡行を通してである。われわれがそのつど具体的にどのような実存可能性を切り拓いてゆくかは、死を見つめてみるだけでは分かりっこない。この世に投げ入れられてよりこのかた積もり積もったおのれ自身の存在の厚みへと立ち戻り、私に委ねられた既存の可能性、なかならず、現代まで伝承されてきた往古の人びとの既存の可能性を、先取りしつつわがものとして握り直すこと以外に、始まりはありえない。実存の「時間性」は、かくして「歴史性」という形で具体化されるのである。

死を間近にした渡邊は、若き頃そこから学者としてスタートを切った哲学者のテキストに、今一度立ち帰ることを改めておのれに課した。しかも、当時は読むことの叶わなかった「第二の主著」の徹底究明に新境地を拓き、ハイデガー研究に新たな光を投ずるためである。ハイデガー研究者渡邊二郎の五十年後の再デビュー。それは、新資料に拙速に飛びつくのではなく、テキストを読み抜き訳し切ったうえでの、満を持しての新参であった。遺作となった『研究覚え書き』には、「第一の始まり」への回帰がおのずと「あらたな始まり (der andere Anfang)」を生起させるという意味での、始まりの二重性が如実に示されている。新しい始まりは、新奇さの追求によってではなく、原点への歩み戻りによってはじめて打ち開かれる。将来は原初にやどる。

時間性の本来的時熟としての「先駆し反復する瞬間」は、将に來たらんとする死を先取りしては、おのれの既存性を取り返して第一の始まりを反復することで、今ここにあらたな始まりを築く。終わりへの存在が、始まりへの存在へと打ち返され、かつそれが第一の始まりとあらたな始まりに分極し、その両極が振動し連動することで、おのずと「出来事」として生起する。まさにここに「歴史」が稔るのである。

ハイデガー研究上の「第二の主著」『研究覚え書き』を世に送り出すことで、現代日本のハイデガー研究史を劃した渡邊は、死の直前、もう一つ重要な「始まり」に挑んでいた。



おのれの哲学上の全業績をリスト化するという纏め作業は、一見後ろ向きに見えて、じつは、新テキストの研究書を書き下ろすことに優るとも劣らず、前向きであった。なぜなら、それを基礎として自分の膨大な仕事が組織的に後世に遺贈されることを、彼ははっきりと見越していたからである。著者の死後ほどなくして、全十二巻の著作集の刊行が始まった。収録作品の大多数は再刊だが、たんなる新装版ではない。『著作集』ほどの大がかりな出版事業を、「新しい始まり」と呼ばずして何と呼ぼうか。

ところで、或る学者の最晩年の事績という具体例に即して見てきた「先駆と遡行」の連動には、じつは、単独者の生き死にというこれまでの道具立てでは説明しきれない、広大な奥行きがそなわっている。それは、個人の著作集が当人の死後刊行されつつあるという事実からもすぐ分かる。誰も一人では始められないのである。少なくとも、出来したかと思うとたちまち古び、飽きられて投げ捨てられる「新奇なもの」とは異なり、終わりに裏打ちされてつねに新しさを失わないもののみを、「始まり」と呼ぶとすれば、第一の始まりの反復としてのあらたな始まりは、たった一人の人間のなし能うものではない。始まりを築き、創設するという、真にその名に値する「出来事 (Ereignis)」は、複数の入びとの共同事業としてのみ生起しうる<sup>9</sup>。しかもその場合の共同性は、共時的であるばかりではなく、通時的でもある。世代を跨ぎ時代を隔てた人びとの連携が、そこに息づくのである。

そればかりではない。真の始まりは、人間のいのちを超えて存続する事物なしには、たとえば書物という「実体」を欠いては、そもそも保たれることができない。死すべき者どもと存在性格を異にする「自立」した物たちに守蔵されてはじめて、始まりは始まりたりうる。物は始まりを宿らせ、<sup>かくま</sup>匿う。本稿の例で言えば、『著作目録』は、死者と生者との間の約束を可能にしたし、『著作集』は、著者と将来の読者との「遣り合い」<sup>10</sup>の場をしつらえたのである。われわれはそのように物に制約されており、おのれ自身の拠りどころとして大切にすべく、物へと差し向けられている。

メメント・モリ、または死への先駆という主題は、「死を超えるもの」へと行き着かざるをえない。しかもそれは、宗教や形而上学の話に限られない。永遠回帰する自然の営みならざる、この世界に住む人びとの営為たる歴史の次元が語られる以上は、そうなのである。時代を異にする人びとへの顧慮と、時を超えて存続する物たちへの配慮という二重の倫理が、そこに展望されてくることになる。

<sup>9</sup> 本節のここまでの議論はおおむね、三年前に出した『死と誕生 ハイデガー・九鬼周造・アーレント』(東京大学出版会、二〇〇八年一月)の枠内にあるが、これに続く議論は、拙著出版後の経験 世代間協働と物への配慮 に根ざしている。

<sup>10</sup> ハイデガーの『哲学への寄与』の本論第二部は、Zuspielと題されている。渡邊はこの語を「投げ渡し」と訳しているが、私は「遣り合い」と訳す。時代を隔てた者たち同士が、一対に組み合わせられ、時を超えて遣り取りし遣り合いを演ずるという意味での、世代間の対話 = 対決を、意味すべく選ばれた語だからである。拙稿「出来事から革命へ ハイデッガー、ニーチェ、アーレント」(ハイデッガー研究会編『ハイデッガーと思索の将来 哲学への寄与』理想社、二〇〇六年九月、所収)、および、森担当の同書「序」を参照。

## 共時間性の二重の次元 「共同存在」と「もとでの存在」

事物へ関わる態度と他者へ関わる態度とが、根本的に異なっていることを強調し、それぞれ「配慮 (Besorgen)」と「顧慮 (Fürsorge)」と呼んで区別することを提案したのは、『存在と時間』のハイデガーであった。両者はそれぞれ、「もとでの存在 (Sein-bei)」、共同存在 (Mitsein)」とも表現される。物と人を相手とするこの二様の「志向性」を孕みつつ、自分自身へと関わりつつ態度をとっているそのつどの私のあり方の全体が、「気遣い (Sorge)」という術語に定式化されたのである。道具に気を回し、他人に気を配り、わが身を気に懸ける存在者 こうした「気遣い (cura) としての人間」観が、古来伝えられてきたことにもハイデガーは注意を促す (vgl. SZ 196ff.)。物たちとの関わり、人びととの関わり、そして自己自身への関わりが、等しく根源的であり、各々が他に還元されえない独自性をもつことの発見は、世界内存在の現象学の輝かしい功績の一つと言えるだろう。

だが皮肉なことに、物たちとの関わりと人びととの関わりというこの二側面を、ハイデガーは必ずしも考え抜いていないと評されることがある。本来的な「死への存在」、つまり先駆において、死という「最も固有で、没交渉的で、追い越しえない可能性」(SZ 250) がひたすら迫ってくるとき、事物や他者は総じてどうでもよくなり、ただただおのれ自身の存在しうることに投げ返される。では、死への不安に襲われ「単独化」されるその瞬間、事物のもとでの存在や他者との共同存在は、どのような様相をあらためて呈するのかこのもっともな疑問にハイデガーは明確に答えていない、というのである。

自己への気遣いに集中する本来的な時間性の時熟において、事物への配慮と他者への顧慮は、いかにして折り合いをつけられるのか。この問題に、ハイデガー解釈史上最もこだわった一人が、ほかならぬ渡邊二郎であった。このハイデガー学者の絶えざる関心は、物たちのもとでの存在と人びととの共同存在をも含み込んだ形での、まうたき世界内存在の真相究明にあったと言ってよい。この問題連関を指し示すことに、彼は初期以来のハイデガー研究において並々ならぬ力を注ぎ<sup>11</sup>、また晩年には、「言語」「美」「歴史」「自己」といった主要論題に即して、本来性の諸相を独自に掘り下げていった<sup>12</sup>。傑出した哲学史家として、本来性と非本来性との絡み合いの論理を求めてドイツ哲学史に深々と分け入り、ヘーゲルの弁証法にその導きの糸を見出したことも、思い起こされよう<sup>13</sup>。

しかし私が思うに、本来性の問題連関がいかなる広がりをもつかを生身の生き生きしたありさまで示してみせたのは、最晩年の渡邊の生き方そのものであった。そこに証しされた「先駆し反復する瞬間」には、「もとでの存在」と「共存在」がいかなる本来化を蒙るかが、例証されているのである。

<sup>11</sup> 『著作集』第一部を形づくるハイデガー研究集成の四巻(とりわけ第一巻「ハイデッガー」および第三巻「ハイデッガー」)所収の諸論考を参照。

<sup>12</sup> 『著作集』第三部を成す四巻(第九巻「解釈・構造・言語」、第十巻「芸術と美」、第十一巻「歴史と現代」、第十二巻「自己と世界」)所収の諸作品を参照。

<sup>13</sup> 『著作集』第二部に纏められた哲学史研究四巻、とくに第六巻「ニーチェと実存思想」中の『ニヒリズム』と、第八巻「ドイツ古典哲学」所収の諸論文を参照。

『存在と時間』の著者ハイデガーが、古代人アリストテレスを「おのれの英雄」(SZ 385)として選び、『形而上学』や『ニコマコス倫理学』にひそむ既在の可能性を反復したように、『研究覚え書き』の著者渡邊は、ハイデガーの遺著『哲学への寄与』にひそむ可能性を甦らせようとした。第一の始まりとの「遣り合い」でもってあらたな始まりを開くという仕方での、故人との共同存在可能性がここには見出される。そればかりではない。『研究覚え書き』を書き記していた渡邊は、同時代のハイデガー研究『哲学への寄与』の邦訳はすでに出版されていたと真っ向から対決しようとしたが<sup>14</sup>、同時にそれは、自身もその流れに棹差す近代日本のハイデガー研究の豊かな蓄積を糧にしてであった。また、孤独な思索と著述に沈潜する傍ら、知友との交わりを人一倍重んじた彼は、来たるべき世代のハイデガー研究者に自分の仕事を贈ることで、哲学研究の未来に寄与すべく全力を傾けた。同時代人と切磋琢磨するだけではなく、かつて在りし入びとと一緒に在り、将来に來らんとする入びとと協働する歴史的裾野をそなえた、こうした奥行きある「顧慮」の本来的あり方を、渡邊は、通時的学問継承という形で具現してみせたのである。

このような、他者との本来的共同存在の地平的広がりを支えるのが、事物のもとでの存在のもつ時間的伸び広がりである。ここで範例となりうるのが、書物のもとでの存在なのである。歴史性の議論のさい、ハイデガーは、「建造物や施設」と並んで、「書物」を、「歴史をもつ」「道具や作品」の例として真っ先に挙げていた(SZ 388)。建物ここでハイデガーが思い浮かべているのは大学の建物であろうが、歴代の入びとの住処となり、通時的連帯の拠点となりうるように<sup>15</sup>、書物は、過去 現在 未来の入びとをつなぐ絆の役目を果たす。古典との出会いは、まさに死者との出会いであり、その邂逅可能性を引き継ぎ受け渡してゆくことは、次世代への責任に属する。書物への愛としての「文献学(Philologie)」の精神は、本来的な配慮と本来的な顧慮との交差点で育まれるのである。

ここで、「読むこと、考えること、書くこと」について、あらためて考えてみよう。

或る個人の学問的営為としては、まず本を読み、次いで自分で考え、かくて文章を書く、という順序で事は進むように見える。だが、この営みは単独でなされるのではない。読むことは、書かれたものを介して書き手へと関わる態度であり、既在の入びとと存続する物たちを前提する。それらをよすがとして、考えることが成立するかぎり、思考とは他者との共同事業であり、かつ物象に条件づけられている。自己を見つめる思索が、かりに本来性を意味するとして、どのみちそれは顧慮的かつ配慮的な気遣いであらざるをえない。同じことは、書いたものを介して読み手へと関わる態度としての、書くことについても言え

---

<sup>14</sup> 現在の本来形である「瞬間」が、歴史的 歴史的に肉付けされると、「今日の脱現在化 (Entgegenwärtigung des Heute)」という形態をとる(SZ 391, 397)。「反時代的考察」と題されたニーチェの現代批判を考えてみればよからう。この含蓄ある用語を、渡邊はかつて「現成化の剥奪」と訳したが、改訳版では「現成化の否定」となっている。今を絶対的尺度として歴史を査定する現在中心主義への抵抗・離脱を表示するには、旧訳も捨て難い。

<sup>15</sup> 拙稿「世代をつなぐもの 東京女子大学旧体育館解体問題によせて」(『U P』第四三九号、東京大学出版会、二〇〇九年五月、所収)参照。

る。考えたことがその場で雲散霧消することなく存続するためには、書き留められて何らかの物質的形態に定着させられなければならない。のちのちまで保存されて読み継がれるものとならねばならない。書くことは、このように、刹那ごとの孤立した行為ではなく、事物と他者へと関わる世界内存在の重層的なかたちなのであり、その場合、事物のもとでの他者と共なる存在は、もっぱら現在に関わるのではなく、時間的な伸び広がりをそなえている。いつか誰かに読まれることを想定しなければ、誰も書こうとはしないだろう。『著作目録』にしる『研究覚え書き』にしる、渡邊本人のためだけに記されたわけではない。書くことは、読者となる将来の人びととの協働行為なのである。そしてその不可欠の仲立ちとなるのが、存続する物たち、つまり書物なのである<sup>16</sup>。

考えることは、そのつど、読むことと書くことと組みになって、既在 現在 将来の脱自的統一を形づくる。だが、そのうちの現在という一契機 「現代の批判」としての「今日の脱現在化」 だけが他者や事物に関わるというのではない。思索者は、対話 = 対決という仕方で同世代の人びとと交わるのみならず、文献解釈という仕方で既在の人びとと、また著作執筆という仕方で将来の人びとと、いつでも共に在る。そして、不在の人びととのそのような共同存在が、死すべき者どもに可能となるのは、死を超え世代を乗り越えて存続する物たちの「共 脱現在化」のおかげなのである。

事物のもとでの存在と他者との共同存在は、時間性のうちの現在の奥行きをなすばかりではない。両者は、既在性と将来とに遍く亘って、時間性の広大な地平を織り成すのである。時間性とは、その意味で、「共 時間性 (Co-Temporalität)」なのである。念のために言い添えると、この場合の「共」は、人びととの共同存在を意味するだけでなく、物たちのもとでの存在をも意味する。共時間性の二重の次元を具えつつ、<sup>コ・テンポラリテート</sup>顧慮し配慮する気遣いが輻輳し交錯するのが、まったき世界内存在の実相なのである。

この種の絡み合いをべつに難しく考える必要はない。哲学者渡邊が文献学者かつ作家としてわれわれに実地に示してみせてくれたことが、そのまま実例となる。われわれが手にしている『研究覚え書き』と『著作集』という物たちが、共時間性の実相を雄弁に語っているのである<sup>17</sup>。いや、そればかりではない。いやしくも「古典」と呼ばれる書物はすべて、もとでの存在と共同存在の次元において「時熟」する。それを繙くとき、われわれは「共脱現在化」させられ、かくして「不死」に与るのである。

<sup>16</sup> サルトルのデビュー作『嘔吐』は、「一冊の書物」が予告されて終わる。主人公ロカンタンは、歴史学研究を捨てて「一篇の小説」を書くべく、パリへ向かう。「本が書かれ、それが私の背後に残る瞬間が必ずやってくる。そして本の多少の光明が、私の過去の上に落ちるだろうと思う。そのときおそらく私は本を通して、嫌悪感なしに私の生涯を思い出すことができるだろう」(Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, in: Œuvres romanesques, Gallimard, 1981, p.210; 『嘔吐』鈴木道彦訳、人文書院、二九七頁)。物の介在によって時間性が成り立つのだとすれば、「即自」と「対自」は、ただ分離併存しているのではなく、同時的かつ継起的に絡み合いつつ相互共在していることになる。サルトルの作品が、本人の死後も、新たに訳され読み継がれていくように。

<sup>17</sup> 拙稿「世代は乗り越えられるか 或る追悼の辞」(東京女子大学紀要『論集』第五九巻2号、二〇〇九年三月、所収)では、主に『研究覚え書き』という事例を下敷きにしなが、テクストを介しての間世代対話について述べた。本論は、この追悼文の続編という面をもつ。

### おわりに 「貢献心」と「世界への愛」

ハイデガーの時間性の議論を続行しようとする本論の考察は、『貢献する気持ち』の内容からは遠く隔たってしまったかに見える。だがそれは見かけにすぎない。むしろわれわれは、まさにここで「貢献心」の現象に出会うのである。

配慮し顧慮する気遣いが、先駆的決意性において本来化され、かつ共時間性の二重の次元に伸び広げられるとき、「前世」と「後世」に対する「現世」内的な応答＝責任が生ずる。時代を超えて存続する物たちを配慮しつつ、世代を隔てて遣り合う人びとを顧慮することは、自己自身への気遣いの本来形でありうる。「貢献心」とは、この「世代間倫理」と別物ではない。そして、そのさらなる別名こそ、「世界への愛」にほかならない。

世界とは、世界内存在するこの私の住処であると同時に、作り出され使い続けられる物たちの事物世界であり、かつ死すべき生まれ出づる者どもの共同世界である。事物世界と共同世界を織り込んで成り立っている、この私の世界は、私が生まれ落ちるずっと前からこの地上に存立し続けてきたし、しばしの滞在ののち私が立ち去ってもしづとく存立し続けるであろう。いのちを超えて存続する地平全体、それが「世界」なのである。

他人に尽くしたいと思う気持ちは、徒手空拳で発揮されるのではなく、何らかの道具によって必ず媒介されている。他者との共同存在は、事物のもとでの存在なのである。のみならず、物たちのもとでの人びとと共なる存在は、既在性と将来の地平へと開かれてこそ具体化されうる。たとえば、一冊の書物、一棟の建物。あるいは、著作集や街並み。それら存続する物が世代をつないで「時熟」するとき、物への配慮は、同時に、時代を隔てた人びとへの顧慮となる。遺贈された物たちを保有し、委譲することは、前代への尽力にして後代への率先であり、その「脱現在化」そのものが、同時代への貢献ともなる。

『貢献する気持ち』で、貢献心は「自然な本能」として捉えられている。「他者に対して自分を生かしたい」と思うのは、自己犠牲というよりは、「自己主張」なのだという。まさにそのとおりである。ボランティアとは自己実現の作法にほかならず、寄贈行為も愛社精神も幸福追求のかたちなのだ。「自己の欲求」が貢献心という形をとるのは、死への先駆にもとづく本来性の達成がさまざまな具象化を経ることを証ししている。

死すべき者どもが、いのちを超えたものに思いを寄せ、それを大切にすることは、滅私奉公でも悪しき物象化でもなく、世界内存在する自己自身をその本来性において具現させることである。それは、自己への愛であると同時に、世界への愛なのである。

メメント・モリから、「世界への愛 (amor mundi)」へ。死について考え抜くことは、終わりへの存在であるとともに始まりへの存在であるわれわれが、死を超えて存続するものへのまなざしを学びとる「不死のレッスン」である。それに習熟するとき、死んだら終わり式のニヒリズムは乗り越えられるにちがいない。(了)